

## 4. 夢の難事件

敦賀市立敦賀西小学校

6年 南部 湧祐

5年 木船 隼 山本 久美子

↓

各務原市立蘇原第二小学校

6年 川島 あかね 加藤 蒔菜 加藤 萌伊

予告状

〇月×日午前〇時きっかりに、そちらの美術館の小判をすべて  
ちょうだいする。

とある美術館に、こんな予告状が届いた。

彼の名前は、細川諭吉。周りからぽちゃ探ていと呼ばれている。あだ名のとおり彼はぽっちゃりしている。美術館の館長は、彼の古い友人だったので、彼はこの事件を引き受けた。

ぽちゃ探ていと館長は、けいび員を三十人用意した。

「三十人で足りるだろうか」

と館長が言った。

「まあ、足りるだろう。そうだ、どうせなら館長自身が見張っていたらどうだ」

と、ぽちゃ探てい。

「そうだ、それがいい」

そして、館長自身が見張ることになった。

が、事件は起きた。

小判のある部屋には、犯人らしきものは誰も入らなかったが、いつの間にか小判は消えていた。

でも、たった一つ手がかりがある。それはもくげき者がいることだ。

早速、ぽちゃ探ていは、もくげき者からいろいろなことを聞き出した。

「まずは、犯人の人相を教えてください」

と、ぽちゃ探ていが言った。

「え、はい分かりました。まず一つ目は、やせていました。そして身軽でした。顔はふく面をしていて分かりませんでした。まあ、簡単に言うとぽちゃ探ていとは正反対ですね」

と証言している。

「ありがとうございました。これらの証言を手がかりに調べさせていただきます。思い出したことがあったらいつでも言ってください」

ぽちゃ探ていはそう言い、推理を明日に回して家のかわりに使っている事務所へと帰

った。帰り道、ぽちゃ探ていは、さっきのもくげき者はちょっと失礼な人だと思った。

次の日、ぽちゃ探ていは推理のことなどそっちのけで、カップラーメンを食べたり昼寝をしたりと、もっと太るようなことをしていた。

すると美術館の館長がやってきた。

「推理は進んでいるかね。一刻も早く私の小判を取り返してほしい。それともう一つ。その口の横のネギは何だね」

と館長。最後の一言にぽちゃ探ていは冷や汗をかいてしまった。

「え、これはその、ネギが犯人ではないのかと……」

ぽちゃ探ていは思わずそんなことを言ってしまった。

「君、よっぱらっているんじゃないのかね。お酒を飲みたくなる気持ちは分かるが、今は小判を探すことに集中してくれ」

そんなことを言って館長は帰っていった。ぽちゃ探ていは間髪だったという気持ちで、深いため息をついた。そして、カップラーメンを買いに、近くのコンビニまで出かけた。そこで、やせた身軽そうな男を見かけた。犯人なわけないと思いながら聞いてみると、なんと〇月×日に美術館へ行っていたそうだ。まず容疑者を一人見つけた。ぽちゃ探ていは事務所へ帰った。そこにはこの間のもくげき者がいた。

「どうしたんですか」

と、ぽちゃ探てい。

「あの……言い忘れたことがあって」

もくげき者は急いでいるように見えたので、ぽちゃ探ていはこう言った。

「事務所に入って話を聞きましょうか。それともここで聞きましょうか」

「はい、ここで……。事件が起こったあの夜、犯人は美術館の中に入らなかったのです。私は外で小判を持ってにげる犯人を見ました」

と新たな情報を教えてくれた。

「ありがとうございました」

もくげき者はそう言って帰っていった。ぽちゃ探ていは、ふと思った。

「どうしてあの人は私の事務所を知っているのだろうか。それににげるところを見たのなら、どうして美術館の中に入らなかったと知っているのだろうか」

ぽちゃ探ていは、もくげき者を容疑者に加えた。

次の日、ぽちゃ探ていは三十人の警備員全員に事件について覚えていることはないか聞いてみた。すると、背の低いやせた男が、小判の入っている箱のふたを開けたというのだ。ためしに箱についた指もんを調べてみると、なんとその人の指もんが付いていたのだ。それにその人はとちゅうで帰ったらしいのだ。これで決まった。

「犯人はおまえだ」

と、ぽちゃ探てい。館長は、

「どうしてそうだと決めつけるんだい」

と聞いた。

「それでは教えましょう。犯人はあの夜、小判の入った箱を開け、小判をぬすみ、そして、そのまま家に持ち帰ったのだ。もくげき者は、犯人は背が高いと言っていたが、かれは背が低い。それはなぜか。それはきっともくげき者は、じっと犯人を見ていた訳じ

ゃなく、にげているところを見た。だからきっと見まちがえたのだろう」

と、ぽちゃ探ていは言った。でも、ぽちゃ探ていは考え直した。

事件はそんな単純なものじゃない。★

「見まちがいで、ぼくを犯人あつかいしないで下さいよ」

「うむ、推理をあやまるなんて君らしくないね」

その警備員と館長の意見に、ぽちゃ探ていも納得してしまった。ではいったい、だれが犯人なのだろう。ぽちゃ探ていは、ロビーのいすに腰をかけ、考え直した。

「もう一度、警備員三十名全員を集めて事件の様子をくわしく聞くことにしよう」

ぽちゃ探ていは、さっそく警備員をよんだ。

「では、A班から。次にB班……」

けれど、E班まで何の手がかりもつかめなかった。残りはF班だけとなった。

「私達は、小判の近くで見張っていました。しかし、いつの間にか消えていたんです」

ぽちゃ探ていは、このF班にくわしい話を聞くことにした。

「あの夜、ぼく達は全員部屋にいて見張っていました。しかし、午前〇時の合図のかねがなると同時に小判がフッと消えたんです」

そんなことがあるのだろうか。全員、現場にいたのに手がかり一つない。ぽちゃ探ていは考えこんでしまった。

次の日、ぽちゃ探ていは熱を出した。しばらく休むことにした。頭が重く、体がだるく感じた。すると、館長がおみまいに来てくれた。

「大丈夫かい？ あまり無理をしないでくれよ」

ぽちゃ探ていは温かいミルクを飲みながら、深いため息をついた。事件はこのまま未解決で終わってしまうのだろうか。

それから三日たったが、熱は一向に下がる気配はみられなかった。そしてその日の夜、ぽちゃ探ていは不思議な夢を見た。それは、こんな夢だった。

「おはようございます」

いきなりいせいのいい声がした。ぽちゃ探ていは夢の中で問いかけた。

「キ、キミは……。いったい誰なんだい？ それに今は、朝じゃないよ」

「えっ、え〜と、ぼくはドロンです。朝じゃないの？」

ぽちゃ探ていは、返事の意味がよく分からなかった。

「ドロンというのかい？ どの国の……」

と問いかけて、言葉がでなかった。なんとドロンと言うのはオバケ(?)だったのだ。足がなく、目のくりくりとしたかわいらしいオバケだった。

ぽちゃ探ていは、オバケだと分かったとたん、腰をぬかしてしまった。そして、そのオバケのドロンはこんなことを言い始めた。

「実は、美術館の小判の件、ぼくなんです」

ドロンは、申しわけなさそうに言った。

「ぼく、毎日毎日ヒマで。それですることがなかったんで、少しいたずらをしてやろうって思ったんです。でも、こんなことになるなんて……。本当にすみません。小判はお返しします」

そう言って、ドロンは消えていった。

次の日の朝。ぽちゃ探ていは気持ちよく朝をむかえた。まるで、今までの熱がウソのようにひいていた。そしてぽちゃ探ていは昨日の夢の事を思い出した。

「ドロンー。あれは、いったい何だったのだろう」

ぽちゃ探ていは、一人でつぶやいた。

よく分からないまま、美術館へと向かった。すると、玄関でいきなり警備員が寄って来てこんな事を言ってきた。

「探ていさん。朝、私がここにきたら、なんと、小判がもとの場所に返されていたんです。だれなんでしょう。不思議です」

ぽちゃ探ていは、ふとドロンの言ったことを思い出した。

——美術館の件、ぼくです。すみません。小判は、お返しします——

たしか、そんなことを言っていた。ぽちゃ探ていは、急いで小判のある場所へかけつけた。そこにしっかりと小判が置いてあった。

ぽちゃ探ていは、天じょうを見上げた。そこには、うっすらとドロンの姿が見えた。そして、こっちをみて、ペコリと頭をさげた。

ぽちゃ探ていは、にっこりと笑った。そして、みんなに向かって大声で叫んだ。

「事件解決」